

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 郎 潔

中国の明清時代には、幾世代にもわたって文学の領域において優れた人材を輩出し、世代をこえて文学的能力の伝承が行われた宗族、所謂「文学世家」が、華東・華南地域を中心に繁栄していた。本論文は、こうした「文学世家」につき、その具体的な状況、文学的能力が伝承される仕組み、さらには宗族が婚姻を通じて、その文学的交遊圏をひろげていくありさま、などを総合的に論じている。

第一章においては、主に海寧査氏宗族と桐城馬氏宗族の二つの代表的な「文学世家」を取りあげ、その実態をさぐっている。清代康熙年間ごろに「文学世家」としての地位を確立した海寧査氏の文学については、詩、散文、詞、小説など、宗族の文学の傾向をジャンルごとに明らかにした点に特色を見いだすことができる。桐城馬氏宗族は、やはり清代のいわゆる「桐城派」として知られる文学者を多く輩出した宗族であるが、宗族成員の作品を収めた大規模な集である『桐城馬氏詩鈔』を取り上げ、その意義について論じた点は、従来の研究に見られない着眼である。

第二章では、明清時代における宗族の教育事情について論じている。第一節では、各宗族における「家訓」の中で、科挙のための学業がいかに強調されているかを指摘し、続く第二節では、陽川孫氏に関する具体的な資料にもとづいて、宗族が族塾を設けて一族の子弟を教育し、科挙合格を目指していた様子、また族塾の維持のために学田を経営していた様子、さらに詩会の主催、出版や蔵書などの族塾の活動について明らかにした。「文学世家」成立の社会的背景と具体的活動について論じた点に意義が認められる。

第三章では、明清文人の「文献」「故家」観について考察し、「故家(世家)」の形成にあたって宗族の文献が果たしていた重要な役割について指摘するとともに、宗族成員の詩文作品の創作・収集・出版・収蔵等の活動に宗族が果たした役割を明らかにしている。本章では、「文学世家」の精神的背景と、それを支えるシステムが具体的に述べられている。

第四章は、姻戚関係にあった秀水朱氏宗族の朱彝尊と海寧査氏宗族の査慎行の二人が、文学的に相互に影響を与え合っていた様子を、二人で福建地方に旅をした時の作など、具体的な作品を引きながら考察している。宗族の文学的影響関係を姻戚関係にまで拡げて考察の対象としたことは、これまでの宗族文学研究に見られなかった成果といえる。

宗族の教育に果たした演劇の役割について、清代宋詩派との具体的な関係、朱彝尊と査慎行らと姻戚関係にあった曹溶の影響などの点にさらなる議論の展開が期待されるものの、明清における「文学世家」の具体的なありさまとその背景について、その社会的背景にまで踏み込んで説明するとともに、一宗族をこえ、姻戚関係にまで及ぶ文学的な影響関係を明らかにした論文として、本論文が博士(文学)の学位を授与するに十分値するとの結論に至った。